

長野県松本市

IDEGAWAMINAMI

出川南遺跡Ⅸ

—— 緊急発掘調査報告書 ——



2000.3

松本市教育委員会

例 言

- 1 本書は、平成11年4月23日～5月13日に実施された松本市双葉に所在する出川南遺跡第9次調査の緊急発掘調査報告書である。
- 2 本調査は株式会社長野開発による開発事業に伴う緊急発掘調査であり、株式会社長野開発より松本市が委託を受け、松本市教育委員会が発掘調査を実施、本書の作成を行ったものである。
- 3 本書の執筆・編集はI：事務局、その他を田多井用章が行った。
- 4 本書作成にあたっての作業分担は以下の通りである。
遺物洗浄：百瀬二三子
遺物保存処理・復原：五十嵐岡子、内沢紀代子、林 和子
遺構図整理：石合英子、田多井用章
遺物実測：竹内直美、竹平悦子、河沢文江、松尾明恵
トレース・版組：櫻井了、田多井用章
- 5 本書で使用した遺構の略称は以下の通りである。
竪穴住居址→住、土坑→土、ピット→P
- 6 図中で用いた方位記号は全て磁北を用いている。
- 7 本調査で得られた出土遺物及び調査の記録類は松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館（〒390-0823 長野県松本市中山3738-1 TEL 0263-86-4710 FAX 0263-86-9189）に收藏されている。

目 次

例 言

目 次

I 調査の経緯

1. 調査に至る経緯 3
2. 調査体制 3

II 遺跡の位置と環境

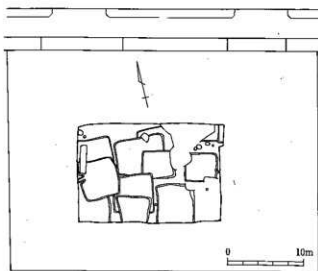
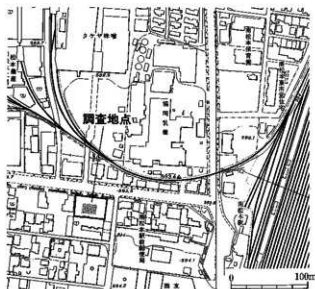
- 3

III 調査の結果

1. 調査の概要 4
2. 遺構 4
3. 遺物 5

IV 調査のまとめ

- 5



第1図 調査地区位置図

Ⅰ 調査の経緯

1. 調査に至る経過

出川南遺跡は、南松本駅周辺の市街地に位置し、これまでも開発行為にともない、緊急発掘調査が行われている。こうしたなか、平成11年3月に株式会社社長野開発による共同住宅建設工事にかかわる埋蔵文化財の保護について照会があった。今回の事業地は、出川南遺跡の北端に近接しており、埋蔵文化財を包蔵する可能性があったため、事業者と協議を行い、試掘調査を実施して埋蔵文化財の有無を確認することとした。

試掘調査は平成11年4月に実施され、古墳時代の遺構・遺物が確認された。この結果を踏まえ、再度遺跡の保護協議を行い、建設工事により埋蔵文化財が破壊される建物建設範囲について発掘調査を行って遺跡の記録保存を図ることとなり、株式会社社長野開発と松本市の間に平成11年4月22日付けで発掘調査業務の委託契約書が締結され、松本市教育委員会が発掘調査を実施する運びとなった。現地での発掘調査は平成11年4月23日～5月13日まで行われ、終了後引き続き考古博物館において、整理作業および本報告書の作成を行った。

2. 調査体制

調査団長 竹瀬公章（松本市教育長）

調査担当者 田多井用章、堀 久士

調査員 今村克、松尾明恵

協力者 浅井信興、飯島由次、五十嵐周子、石合英子、入山正男、内沢紀代子、遠藤美保、大月八十喜、開嶋八重子、鷺見昇司、竹内直美、竹平悦子、中上昇一、中谷高志、畑茂、林和子、藤本利子、布野行雄、布山洋、洞沢文江、前沢保亀、村山牧江、百瀬二三子、百瀬義友、横山真理

事務局 木下雅文（文化課長）、熊谷康治（文化課長補佐）、松井敬治（文化課長補佐）、久保田剛、武井義正、酒井まゆみ

Ⅱ 遺跡の位置と環境

出川南遺跡は、現在の松本市芳野・双葉地区に位置する。今回の調査区は、出川南遺跡の北端にあたり、現在の双葉地区に該当する。標高は593mほどで、奈良井川扇状地と田川・牛伏川扇状地が接する沖積扇状地性堆積の末端に形成されている。現在は市街地化が著しい地域である。

出川南遺跡は弥生時代後期～平安時代にわたる集落であり、この間に若干の断絶をはきみつ集落が営まれている。これまで出川南遺跡では8次にわたる調査が行われているが、これまでの調査地点は遺跡の東側と西側とに分けることができる。遺跡の東側では第1・6次調査が実施されており、共に遺構面が2枚ある。上の面が平安時代、下の面が弥生時代後期～古墳時代後期である。遺構検出面の間には間層がある。遺跡西側では2～5・7・8次調査が実施されている。いずれも古墳時代後期～平安時代の集落が確認されており、とくに第4次調査では古墳時代後期の大規模な集落をとらえることができた。また、9世紀代を中心とした平安時代の集落もこれらの一連の調査の中でその広がり確認された。5・7・8次調査地点では古墳時代末～平安時代前期の遺構が高い密度で検出されている。

後述のように、今回の調査では古墳時代前期の集落が確認できたが、これまで出川南遺跡として把握している範囲の中では古墳時代前期の明確な集落は確認できていない。第7・8次調査地点で該期の土器が若干出土しているのみである。しかし、北側に隣接する出川西遺跡では弥生時代中期以降集落が営まれており、古墳時代前期に関しても現在のJR篠ノ井線付近で該期の遺構が確認されている。したがって、今回の調査で確認された該期集落についても、これら出川西遺跡内のものと一連になるものと思われる。近在の遺跡では、今回の調査地点から南東へ1.2km程の竹瀬南原遺跡で該期の集落が確認されているほか、田川右岸の石行遺跡においても集落址が確認され、良好な資料が得られている。現在のところ面的に該期の集落分布を確認するには至っていないが、田川流域に若干の時期差を持ちつつも集落が展開していることをこれまでの調査成果から窺うことができる。しかしながら、今回の調査地点の北東1.5kmに位置する東日本最古級の前方後方墳である弘法山古墳の築造集団の集落はまだとらえられてはいない。

Ⅱ 調査の結果

1. 調査の概要

調査にあたっては、重機により遺構検出面までの表土除去を行った後、人力により検出・遺構掘り下げを行った。遺構などの測量記録は、磁北方向に沿って任意の3m方眼を設定して行った。調査区の設定にあたっては、現場の安全確保等のため、建物建設範囲の一部を調査区から除外した。

調査区の基本的な土層構成は、表土下に灰褐色土層が堆積し、その下のやや暗い灰褐色土層中に遺物が含まれていた。検出面は、この灰褐色土上面とし、地表面からの深さは50cm程度である。遺構覆土と、地山とは色調の判別が難しく、検出作業は困難を伴った。検出にあたっては、地山に比べ暗赤褐色の鉄・マンガン粒を多く含み、色調が若干暗い土層を遺構覆土とした。遺構検出後、掘削を行ったところ、多量の遺物の出土を見た地点もあったが、これら遺物の分布が、当初考えていた遺構のラインと合致せず、遺構外としていた部分にまで遺物の分布が広がる場所もあった。したがって、今回の調査で確認した遺構のうち、古墳時代後期の2軒の住居を除いたものは、本来の遺構とは異なる可能性が高い。このため、本報告書では、古墳時代前期の住居については調査段階で遺構として掘削したものの平面図及び断面図の一部を提示するとともに、出土遺物及びその平面分布について報告することを主としたい。

調査の実施期間・面積・検出遺構・出土遺物の概要は下記のとおりである。

調査期間 平成11年4月23日～5月13日

調査面積 240㎡

検出遺構 竪穴住居 2軒（調査段階では13軒として掘削）

土坑 4基

ピット 7基

出土遺物 土器（土師器・須恵器）、鉄器

2. 遺構

先述のように、今回の調査では古墳時代前期の遺構については、明確に確認することができなかった。現場調査段階では13軒の住居として掘削を行い、この内2軒の古墳時代後期の住居については、平面形を比較的明瞭に把握することが可能であったので、これらについては住居として報告する。その他については、平面形及び断面図の一部を提示するとともに、遺構としては扱わないこととした。ただし、古墳時代前期の土器が多量に出土した地点が2箇所見られたため、これらについては土器集出地点として報告したい。

(1)古墳時代後期の竪穴住居

第142号住居 調査地区西端中ほどに位置し、一部が調査区外にかかる。5.2m×5mの隅丸方形を呈し、西壁にカマドが設けられる。カマドは油石の一部が残存し、火床は顕著に赤化。本址は古墳時代前期の遺構を貼っていたらしく、床面が判然とせず、結果的に前期の遺構の床面まで掘削してしまった。このため、床面からは古墳時代前期の土器が出土している。後期の土器はカマドを中心として出土している。

第143号住居 調査地区北西隅に位置し、大半が調査区外にかかる。このため、遺構の詳細は不明。古墳時代前期の遺構を切っているものと思われる。床は地山直床だが、若干硬化していた。遺物は覆土中より出土しているが、量的にはそれほど多くない。

(2)土器集出地点

今回の調査では、土器がまとまって出土した地点が2箇所見られたが、これらは当初遺構としていた範囲をまたいで分布するため、それぞれ遺物集出地点として把握することとした。ともに遺物量は多く、今回図示することのできた個体のおよそ6割は同集出地点からの出土による。古墳時代前期には、住居覆土中から多量の遺物が見られるという指摘もあり（文献1）、今回の集出地点も本来は住居等との遺構に伴うものと考えられる。なお、今回の調査で遺構として掘削した範囲では、住居に伴うと思われるような炉址や柱穴等は確認することができず、貼床等の明瞭な床面についても確認できなかった。各遺構の掘削深度は検出面より60cm程度で、遺物が集中して出土した深度（検出面から40～50cm程度）から10cm程度掘削した。全般的に、この深度になると遺物の出土は見られなくなっていた。

土器集出地点1 第143号住居から第146号住居にかけて、土器がまとまって出土し、これを整理作業段階で土器集出地点1とした。掘削時は143・146両住居を別個に掘削したが、143住東側と146住北西隅に多量の土器の出土が見られた。両住居の完掘後、両遺構にはさまれた、当初遺構外としていた部分を掘削したところ、この部分にも遺物の分布が見られ、最終的には一連の遺物のまとまりとして把握すべきものと考えられた。

土器集出地点2 第144号住居から第145号住居にかけて土器がまとまって出土し、これを整理作業段階で土

集落中出土地点2とした。当初は144・145号両住居址を別個に掘削し、遺物の取り上げを行ったが、平面分布・垂直分布とも一連のものと思われる出土状況を呈していた。

3. 遺物

今回の調査で出土した遺物は、古墳時代後期に帰属すると思われる3点の鉄器（鎌・刀子）と土製品1点を除き全て土器で、特に古墳時代前期のものが主体をなす。先述のように、土器の多くは集中出土地点出土のものである。図化できた個体は159点で、これらのうち土器集中出土地点と、比較的まとまって出土して141・142住出土のものについては、出土状況を図示した。なお、鉄製品については紙数の都合から今回は掲載を見送った。

①古墳時代前期の土器

図示した土器は、破片からの復元実測を行ったものが多く、口縁部から底部まで復元できる個体は見られなかった。土器の胎土はいずれも在地のものとして違和感はなく、搬入品と思われるものはなかった。器種には（高）坏・（台付）甕・壺・有孔鉢がある。なお、以下の記述にあたっては、赤塚次郎氏による尾張地方の編年（文献2）および北島大輔氏による三河地方の編年（文献3）を参考とした。

高坏はやや内湾しつつ直線的に開く器形のもの（65・72など）と、半球形の坏部が屈曲して開く有段（高）坏（98・99など）の2者がある。前者は口縁端部に明瞭な稜が認められるのではなく、また脚部には明瞭な内湾脚がなく、外反もしくは直線的な脚であるなど、新しい様相を示し、廻間Ⅲ式に対比できる。後者は市内では類似が見られないが、三河地方では多く見られる器種のように、東日本各地でも散見される器種との指摘がある（文献3）。なお、脚部の透かしは確認できたものでは4単位までで、これ以上のものはなかった。

壺は底部から口縁部まで残存するものがなく、台付かどうか不明な点も多いが、脚部が多く出土しており、台付甕の占める割合が比較的高かったことを示している。壺は口縁部形態から①口縁部がくの字に屈曲して開くもの②受口口縁のもの③S字状口縁のものがあり、大半がく字口縁部に占められる。弥生時代後期からの伝統的な器種である波状文をもつ有文壺は153住から1点出土したのみである。受口口縁壺は少量ながら一定量伴うように、土器集中出土地点1・2とも見られる。屈曲部に加飾（刺突）のあるものも見られるが、これらは他の土器群に比べ古い様相を持つ。S字状口縁壺（126）は、口縁部形態の特徴から廻間Ⅲ式あたりに位置づけられるものか。

甕は口頸部が内湾するものと、口縁を拡張するものがある。前者は比較的大型の広口甕（103）と小型のもの（102）とがあるが、いずれも口頸部が内湾し、口縁端部は面取りされる。口縁を拡張するもの（104）は、口縁端部下面への貼付けにより口縁外面を拡張している。拡張された外面及び内面が文様帯とされ、外面はヘラ書きの斜格子文が、内面は板状工具による横方向3段の羽状の刺突が施文される。

出土地点別に見ると、土器集中出土地点1・2に加え、141住出土のものもある程度量的にまとまっている。3地点とも土器群の内容は近似しており、ほぼ同時期のものと考えられる。編年の位置付けであるが、東海地方の編年成果を援用すれば、高坏・S字状口縁壺の特徴から廻間Ⅲ式と並行するものとできよう。松本市内での既出資料との対比を行うならば、弘法山古墳出土土器群（文献4）よりは新しく、石行遺跡出土土器群（文献1）よりは古いものと考えられる。

②古墳時代後期の土器

142住（34～40）及び149住（53～57）より出土しているが、量的にはそれほど多くはない。142住のものはカマド周辺からまとまって出土している。両址出土土器群とも、古墳時代後期でも前半、出川南第2段階（文献5）に位置づけられよう。

参考文献

- 1 松本市教育委員会 1987 『松本市赤木山遺跡群Ⅱ』松本市文化財調査報告No.47
- 2 赤塚次郎 1990 『廻間遺跡』朝愛知県埋蔵文化財センター
- 3 北島大輔 1998 『桜林遺跡出土古式土器をめぐるとの諸問題』安城市教育委員会
- 4 松本市教育委員会 1993 『弘法山古墳出土遺物の再整理』松本市文化財調査報告No.111
- 5 松本市教育委員会 1994 『松本市出川南遺跡Ⅳ・平田里古墳群』松本市文化財調査報告No.115

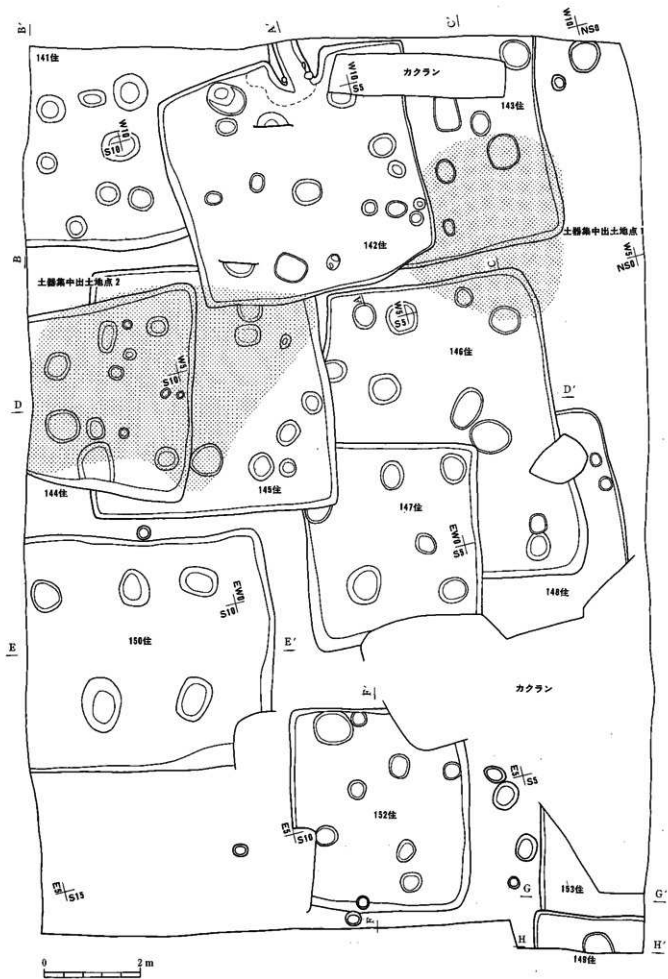
Ⅳ まとめ

今回の調査により、古墳時代前期・後期の集落の一端を調査することができた。古墳時代前期の遺構は、明瞭に確認することができなかったものの、該期土器群が多量に出土し、良好な資料を得ることができ、該期集落はなお周辺に広がっているものと思われる。土器群には台付甕が多く組成するなど、東海地方の影響を強く受けているものと思われる。松本平ではこうした特徴を持つ土器群は既出の集落址出土資料には見られないことから、今後の土器編年研究、また該期における社会の動向を探るうえで貴重な資料が得られたといえよう。

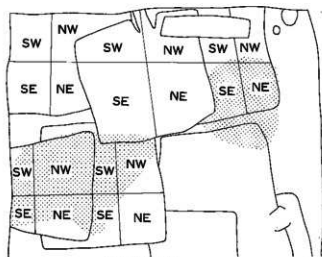
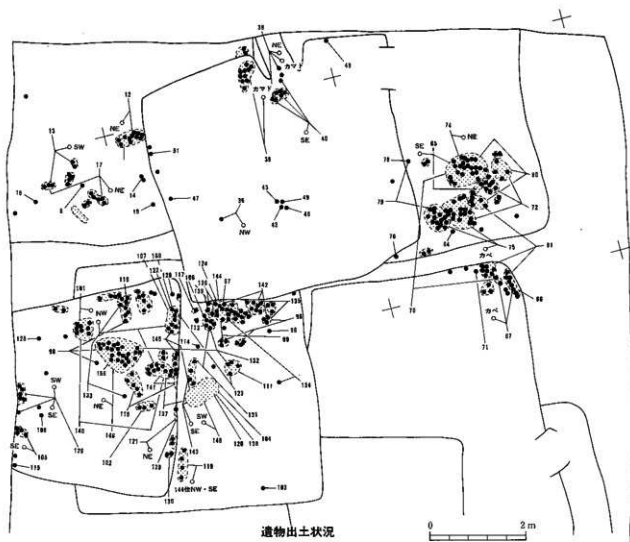
第1表 出土土器一覽表(土器集中出土地点1・2)

No.	種別	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存度	色調		成形・調整・形態の特徴等	
							口縁	底部		
64	土製品	はずみ車					橙褐～黒褐	淡灰褐	外面ナデ 焼成前穿孔	
65	土師	高坏	22.0			1/2	淡褐～褐	橙褐	外面ハケ後縁のミガキ 内面縁のミガキ 内外面とも調整は丁寧	
66	土師	壺	18.4			1/8	褐	褐	内外面ハケ	
67	土師	壺	11.5			5/6	暗褐	暗褐	外面ヨコハケ後タテハケ 内面ナデ摩滅 一部ハケ 口縁部ヨコナデ	
68	土師	壺	16.6			1/3	褐～灰褐	褐～灰褐	外面ハケ、内面工具ナデ 口縁部ヨコナデ	
69	土師	台付壺					暗褐	暗褐	外面ハケ 内面ナデ摩滅	
70	土師	壺					暗褐	暗褐	内外面摩滅著しい 内外面ヨコハケ	
71	土師	壺	18.0			1/4	黒～褐	黒～褐	外面ハケ 内面ナデ 口縁部ヨコナデ	
72	土師	高坏	25.8			2/7	褐～灰褐	淡灰褐	外面上半斜めのミガキ、下半ヨコミガキ 内面ミガキ摩滅	
73	土師	壺?	25.8			1/6	橙褐	橙褐	外面ハケ摩滅 内面ナデ 口縁部ヨコナデ	
74	土師	壺	17.2			1/3	暗褐	暗褐	外面ハケ 内面ハケ 下半に一部ナデ	
75	土師	壺?	20.0			2/3	暗橙褐	暗橙褐	胴部外面ハケ、内面ハケ一部ナデ 口縁部ヨコナデ	
76	土師	台付壺		6.7			完	橙褐	橙褐	内外面ハケ 胴部内面上半指ナデ、下半ヨコナデ
77	土師	台付壺						暗橙褐	褐	外面ハケ 胴部内面ミガキ 胴部内面工具ナデ、一部ハケ
78	土師	台付壺		10.5		2/3	淡褐～黒褐	橙褐～灰褐	体部外面ハケ、内面ナデ 胴部内面ハケ	
79	土師	台付壺					橙褐～暗褐	橙褐	内外面摩滅著しい ナデか	
80	土師	有孔鉢	16.2	5.6	8.9	2/3	完	褐～淡灰褐	褐	外面ハケ摩滅 内面工具ナデ、一部ハケ 調整は丁寧
81	土師	有孔鉢	15.1	4.8	9.2	1/4	完	黄褐～黒褐	黄褐～灰褐	外面ハケ摩滅 内面工具ナデ、底部付近はハケ
82	土師	壺?	30.6			一部	暗黄褐	暗黄褐	内外面粗いハケ 口縁部端面取り	
83	土師	壺	27.5			1/3	橙褐	橙褐	外面ハケ 内面ナデ	
84	土師	壺	14.2			1/8	黒～褐	黒～褐	外面ハケ 内面工具ナデ 口縁部ヨコナデ	
85	土師	壺					黄褐	黄褐	外面胴部ハケ 頸部ヨコナデ 内面工具ナデ 調整ヨコナデ	
86	土師	壺?	19.6			1/4	淡褐	橙褐	内外面摩滅著しい 外面ハケ、屈曲部に刺突文 内面ナデ	
87	土師	台付壺		10.4		1/5	淡灰褐～橙褐	淡灰褐～橙褐	外面ハケ、内面ヨコナデ	
88	土師	台付壺					暗橙褐	暗橙褐	内外面工具ナデ摩滅	
89	土師	壺	20.6			一部	褐	暗褐	外面ハケ 内面工具ナデ 口縁部外面ナデ、内面ハケ	
90	土師	壺	16.2			一部	褐	黒～褐	内外面ナデ 口縁部ヨコナデ 屈曲部に横長の刺突	
91	土師	坏	13.0			1/6	橙褐	橙褐	内外面ミガキ摩滅	
92	土師	高坏					橙褐	橙褐	内外面摩滅 外面ミガキ 内面ケズリ 透かし3単位	
93	土師	高坏		11.2		1/6	橙褐	橙褐	外面ミガキ一部ヨコハケ 内面工具ナデ	
94	土師	高坏		13.4		1/8	暗褐	暗褐	外面ミガキ摩滅 内面ハケ摩滅 透かし単位不明	
95	土師	高坏	17.0			1/5	橙褐～灰褐	橙褐	内外面ともミガキ摩滅	
96	土師	高坏					橙褐	橙褐	外面ミガキ摩滅 内面ナデ	
97	土師	高坏					橙褐	橙褐	坏部外面ハケ後ミガキ 内面ハケ摩滅 胴部外面ミガキ 内面工具ナデ 透かし4単位	
98	土師	高坏	18.6			1/3	暗褐	暗褐	内外面ともハケ後ミガキ 調整は丁寧	
99	土師	高坏	22.2			1/5	暗褐	暗褐	内外面ともハケ後ミガキ 調整は丁寧	
100	土師	高坏		15.6		1/8	暗橙褐	暗橙褐	外面に横線文・刺突文 内面ナデ 内外とも摩滅著しい	
101	土師	壺	6.7			3/4	褐～橙褐	橙褐	内外面摩滅著しい ミガキか	
102	土師	壺	4.0			3/5	橙褐	暗橙褐	内外ともナデ摩滅	
103	土師	壺	13.8			1/4	橙褐～暗橙褐	暗橙褐	内外面ともミガキ 口縁部端面取り	
104	土師	壺	19.0			1/12	暗褐	暗褐	内外面ともハケ後ミガキ 内外面とも羽状の刺突文	
105	土師	台付壺					淡褐～暗灰褐	暗灰褐～黒	外面ミガキ摩滅 内面ナデ	
106	土師	台付壺		9.2		完	暗褐	暗褐～暗橙褐	内外面ともハケ	
107	土師	不明		3.2		3/4	褐	褐	外面指ナデ 内面ハケ	
108	土師	台付壺					暗褐～暗橙褐	暗褐～暗橙褐	外面ハケ摩滅 内面工具ナデ	
109	土師	台付壺					暗灰褐	暗灰褐	内外面摩滅 外面ハケか	

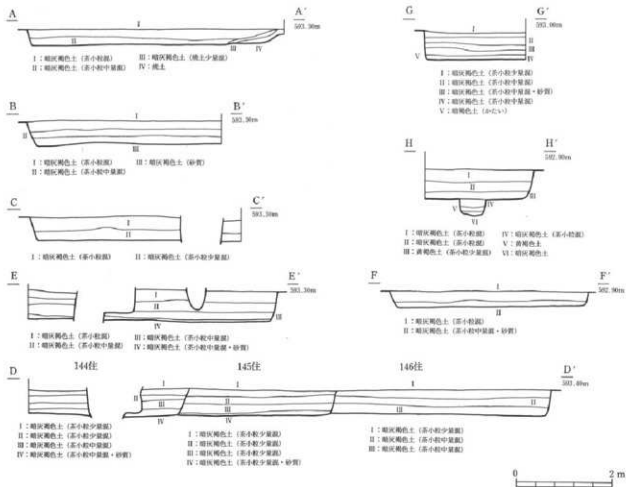
No.	種別	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存度 口縁 底部	色調		成形・調整・形彫の特徴等
							外	内	
110	土師	甕	12.2			1/4	暗灰褐	暗灰褐	外面ハケ摩滅 内面工具ナデ 口縁部ヨコナデ
111	土師	甕	14.0			1/4	淡褐～暗褐	淡褐～暗褐	外面ハケ 内面指ナデ 口縁部ヨコナデ
112	土師	甕	12.7			1/8	暗褐～黒褐	暗褐～灰褐	外面ハケ 内面指ナデ 口縁部内外面ヨコナデ
113	土師	甕	12.0			1/6	暗褐～暗橙褐	暗褐	外面ハケ、内面工具ナデ 口縁部ヨコナデ
114	土師	甕	12.4			1/4	暗褐	暗橙褐	外面ハケ 内面工具ナデ
115	土師	壺	16.4			1/4	淡褐	灰褐～淡褐	内外面摩滅 外面ハケ
116	土師	甕	18.1			1/5	暗灰褐	暗褐	内外面ハケ
117	土師	甕	21.0			1/3	暗褐	暗褐	外面ハケ 内面ナデ
118	土師	甕	16.4			1/4	橙褐～暗橙褐	橙褐～暗橙褐	外面ハケ 内面ナデ 口縁部外面ヨコナデ、内面ハケ摩滅
119	土師	甕	15.0			1/3	暗赤褐	暗赤褐	外面ハケ 内面口縁部ハケ 胴部工具ナデ 口縁外面屈曲部に刺突
120	土師	甕	15.4			一部	暗褐	淡褐～暗褐	外面ハケ 内面工具ナデ 口縁部ヨコナデ
121	土師	甕	19.4			1/6	暗褐	暗褐	内外面ともハケ
122	土師	甕	15.0			1/12	暗褐	暗褐	外面ハケ 内面工具ナデ 口縁部ヨコナデ
123	土師	甕	18.0			1/4	暗褐～暗橙褐	暗橙褐	内外面とも摩滅 外面ハケ、内面ナデか
124	土師	甕	17.4			1/5	暗褐	褐～暗褐	外面ハケ 内面口縁部ハケ、胴部工具ナデ
125	土師	甕	15.4			1/6	暗灰橙褐	暗灰橙褐	内外面摩滅 外面ハケ、内面ナデ 口縁部ヨコナデ
126	土師	甕	20.0			5/6	橙褐～灰橙褐	橙褐	外面ハケ 内面ナデ、屈曲部にハケ 口縁部ヨコナデ
127	土師	甕	21.0			一部	淡褐～灰褐	淡褐	外面ハケ 内面ナデ 一部ハケ
128	土師	甕	16.6			1/3	橙褐～黒褐	橙褐	外面ハケ摩滅 内面ケズリ状のナデ摩滅 口縁部ヨコナデ
129	土師	甕	20.0			1/8	橙褐	橙褐	外面ハケ 内面工具ナデ 口縁部外面ヨコナデ、内面ハケ
130	土師	甕	17.5			1/6	淡褐～黒	淡褐～黒褐	外面ハケ 内面口縁部ハケ、胴部工具ナデ
131	土師	甕	32.0			1/3	暗褐	暗褐	外面ハケ 内面ハケ摩滅
132	土師	甕					暗褐	暗橙褐	外面工具ナデ 内面ナデ
133	土師	甕					褐～暗灰褐	暗褐～褐	外面ハケ 内面工具ナデ
134	土師	甕	5.2			1/2	暗褐～暗橙褐	暗褐	外面ハケ摩滅 内面工具ナデ 底面ハケ後ナデ
135	土師	甕	20.0			1/4	褐～暗褐	褐～暗褐	外面上半ハケ、下半工具ナデ 内面口縁部ハケ、胴部工具ナデ
136	土師	甕	18.4			2/5	暗褐～暗橙褐	暗橙褐	外面ハケ摩滅 内面工具ナデ
137	土師	甕	16.4			1/4	褐～暗褐	淡褐～褐	外面ハケ 内面指ナデ 口縁部外面ヨコナデ、内面ハケ
138	土師	甕	18.4			一部	暗褐	淡褐～暗褐	内外面ハケ 口縁部ヨコナデ
139	土師	甕	19.0			1/2	暗褐	暗褐	外面ハケ 内面口縁部ハケ、胴部工具ナデ
140	土師	甕					淡褐～淡灰褐	褐	外面ハケ 内面工具ナデ
141	土師	甕					褐～橙褐	淡褐～灰褐	外面ハケ 内面上半工具ナデ、下半ハケ
142	土師	甕					褐～暗褐	暗褐	外面ハケ 内面底部付近ハケ後工具ナデ
143	土師	台付甕	7.2			完	暗褐	暗褐	外面ハケ 内面工具ナデ
144	土師	甕					暗褐	暗褐	内外面ともハケ
145	土師	甕					淡灰褐～黒褐	灰褐	外面ハケ 内面ハケ後一部工具ナデ
146	土師	甕					灰褐～橙褐	橙褐	外面ハケ 内面工具ナデ、下部はハケ
147	土師	甕					褐～黒	暗褐～暗橙褐	外面ハケ 内面ナデ摩滅
148	土師	甕					暗褐	暗褐	外面ハケ 内面工具ナデ 一部指ナデ
149	土師	壺	3.9			完	褐～橙褐	褐	外面ミガキ摩滅 内面工具ナデ 底面ミガキ摩滅か
150	土師	甕	4.6			1/4	暗橙褐	橙褐	外面ハケ摩滅 内面工具ナデ 底面ナデ
151	土師	甕	8.4			1/3	橙褐～淡橙褐	褐	内外ナデ摩滅
152	土師	高塚	13.0			1/6	灰褐	灰褐	外面ミガキ、一部ハケ 内面工具ナデ
153	土師	台付甕					灰褐	灰褐	外面ハケ 体部内面工具ナデ 胴部内面ナデ
154	土師	台付甕	10.9			2/3	淡褐～淡灰褐	淡褐～淡灰褐	外面ハケ 内面工具ナデ
155	土師	甕	5.2			1/4	暗褐～橙褐	淡黄褐	内外面ともハケ 底面ナデ
156	土師	甕	3.9			5/8	褐～黒褐	淡褐	外面ハケ後ヘラケズリ 内面ハケ 底面ナデ
157	土師	甕	5.4			1/4	暗橙褐	暗橙褐	内外面・底面ともナデ
158	土師	壺	14.1			1/8	橙褐	橙褐	内外面工具ナデ口縁部内面一部ハケ
159	須恵	?	14.6			1/6	明灰	明灰	ロクロナデ



第2図 検出遺構



第3図 遺物出土状況



第4图 土層断面图



143住出土状况



146住出土状况

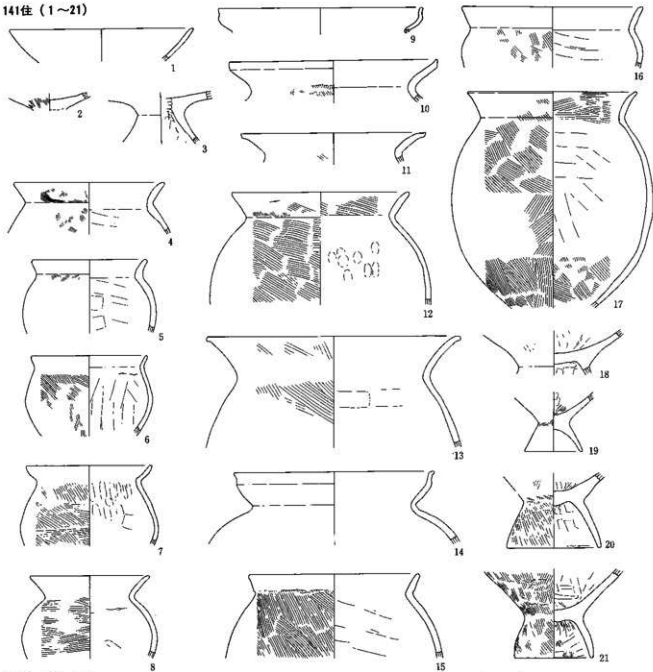


144住出土状况

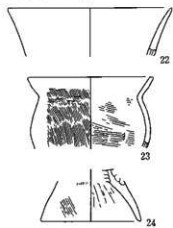


145住出土状况

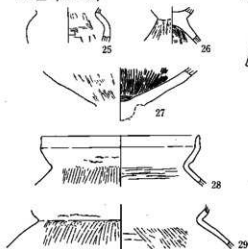
141住 (1~21)



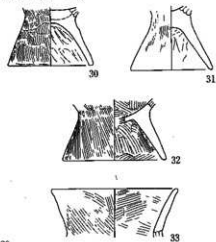
149住 (22~24)



150住 (25~29)



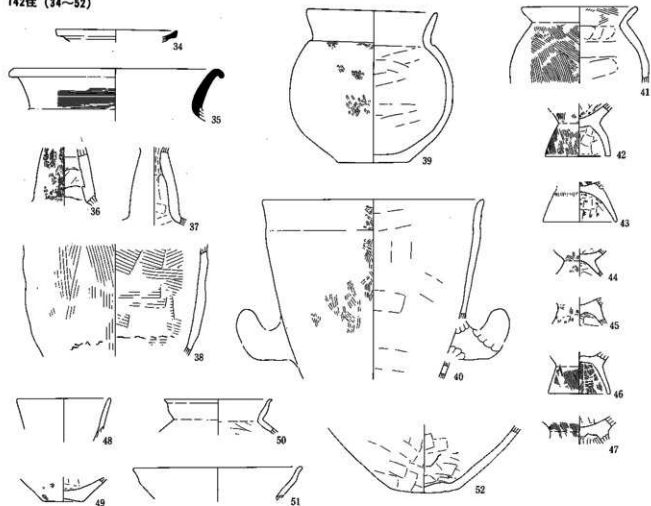
152住 (30~33)



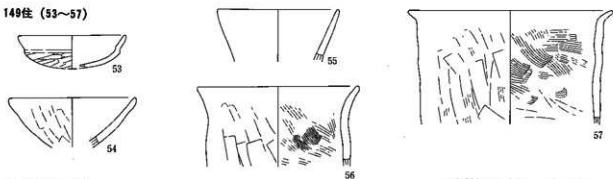
0 10cm

第5圖 出土土器(1)

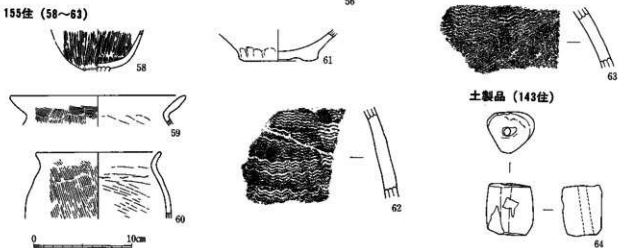
142住 (34~52)



149住 (53~57)

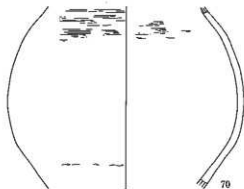
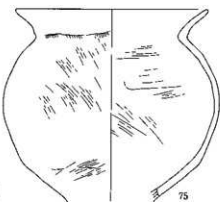
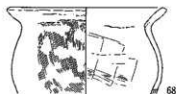


155住 (58~63)

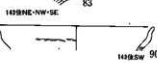
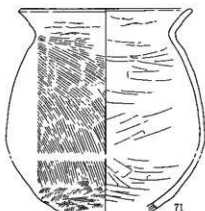


第6圖 出土土器(2)

土器集中出土地点1 (85~81)



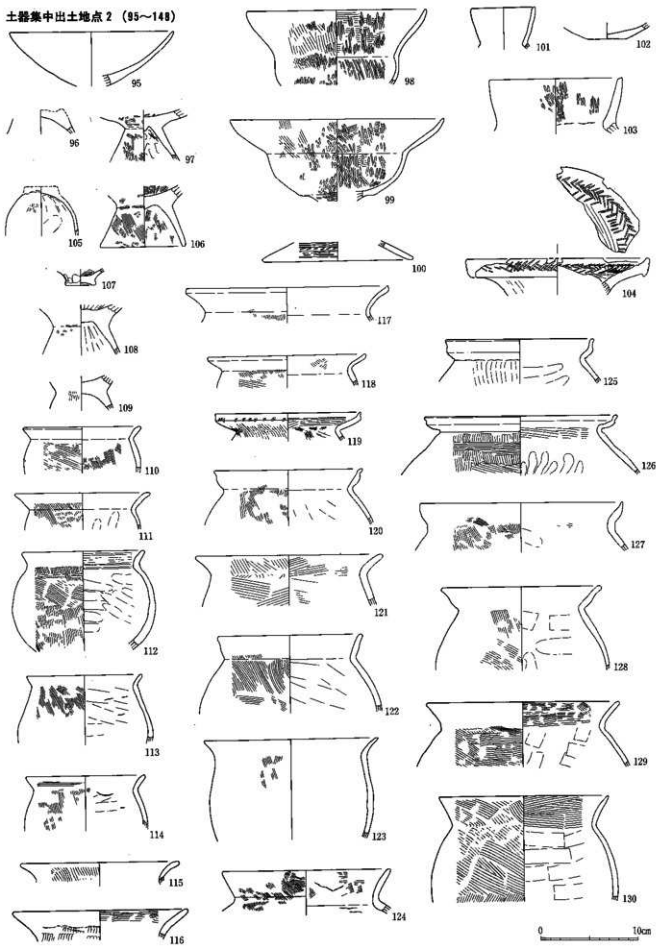
土器集中出土地点1 付近 (82~84)



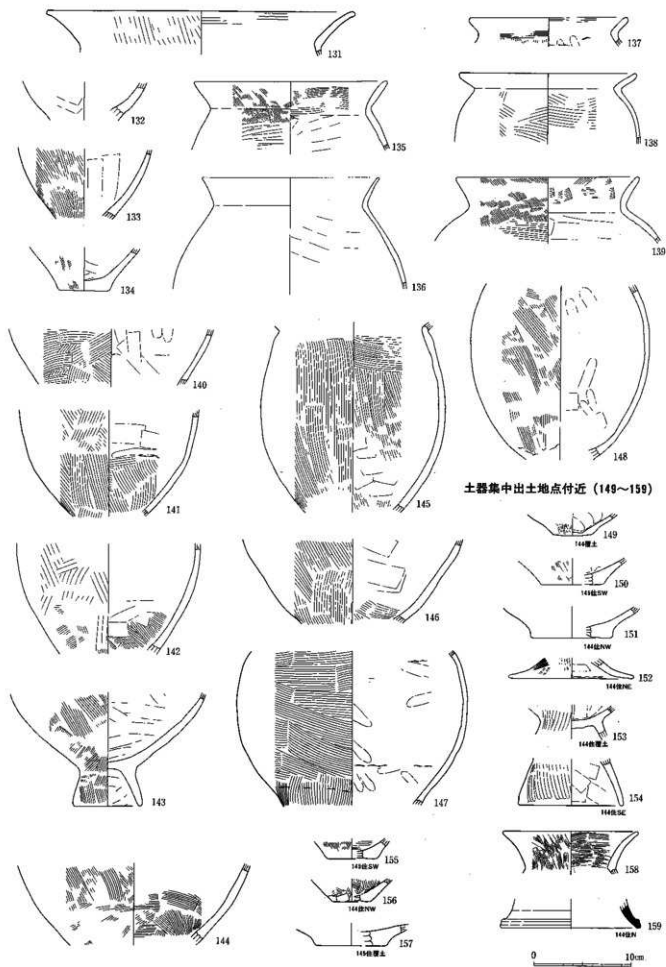
0 10cm

第7図 出土土器(3)

土器集中出土地点 2 (95~148)



第 8 图 出土土器(4)



土器集中出土地点付近 (149~159)

第9図 出土土器(5)

出川南遺跡緊急発掘調査報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとしいでがわみなみいせききんきゅうはくつちょうさほうこくしょ							
書名	長野県松本市出川南遺跡Ⅸ緊急発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	№148							
編著者名	田多井用章							
編集機関	松本市教育委員会							
所在地	〒390-0873 長野県松本市丸の内3番7号 (記録・資料保管：松本市立考古博物館・〒390-0823 松本市中山3738-1・TEL0263-86-4710)							
発行年月日	平成12(2000)年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
いづのかわ 出川南	ながのけん 長野県 まつもと 松本市 ふたば 双葉	市町村	遺跡番号	36度 12分 26秒	137度 58分 20秒	19990423～ 19990513	240	共同住宅建設に伴う 緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
出川南	集落跡	古墳	竪穴住居址 土坑 ピット		土器・陶器(土師器・須恵器) 金属器(鉄器)		古墳時代前期・後期の 集落址を確認した	

松本市文化財調査報告 №148

長野県松本市

出川南遺跡Ⅸ

— 緊急発掘調査報告書 —

発行日 平成12年3月24日

発行者 松本市教育委員会

〒390-0873

長野県松本市丸の内3番7号

印刷 藤原印刷株式会社